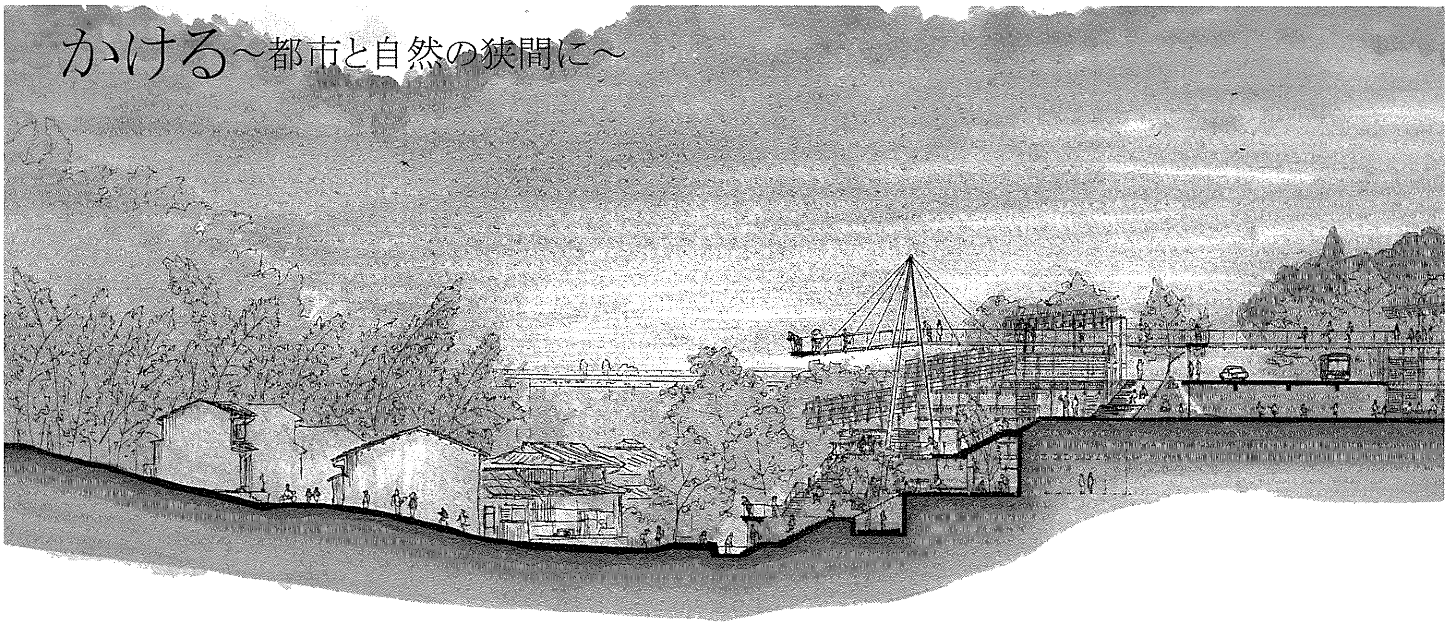
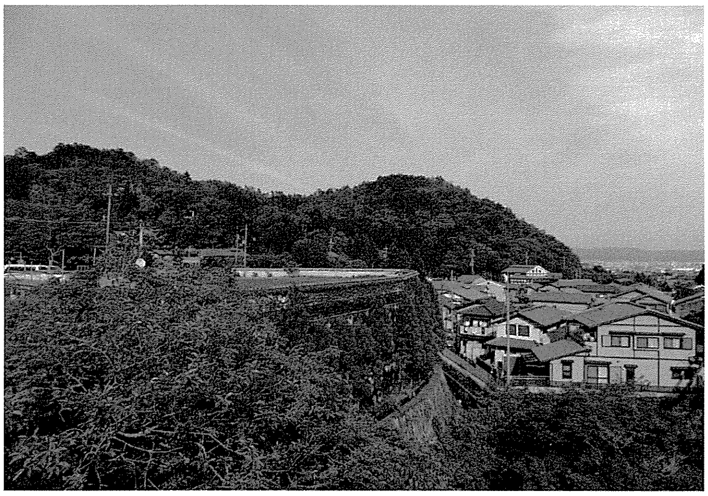
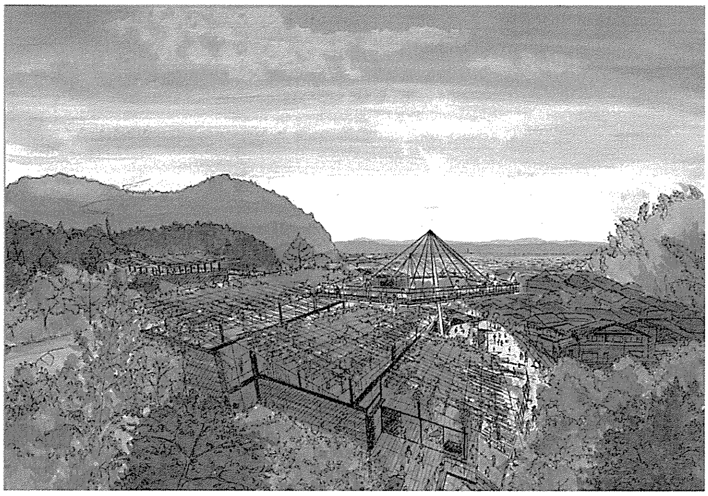
かける～都市と自然の狭間に～







Site：嵯峨野鳥居本地区

京都市中心部から見て西方、都市と自然の接する場所。伝建地区として古くからの街並みを残しながら、すぐ隣には住宅地があり、町中で遊びまわる子供たちの姿が見受けられる。日常と非日常が混然一体となった場所である。

敷地は、鳥居本地区に接する北側の一角。車道を境に、北側は山麓の傾斜地、南側は人工的に盛り土が施された結果、不自然な崖のような地形になっている。ここに本来の地形を復元し、山と街をつなぐ新たなランドスケープを創り出す。

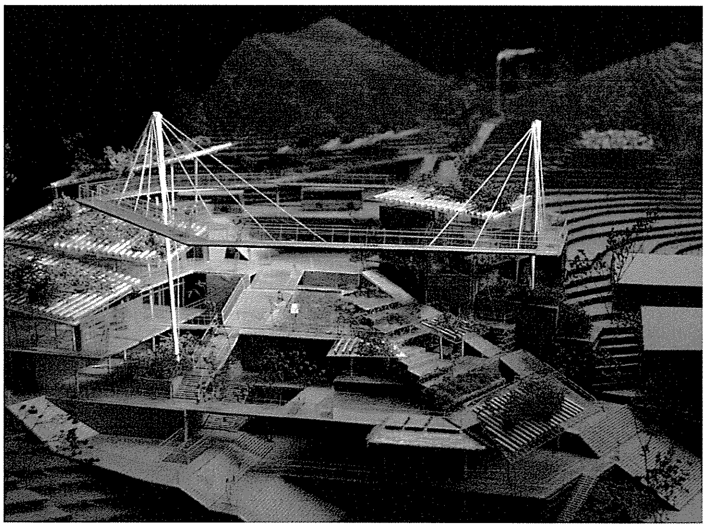
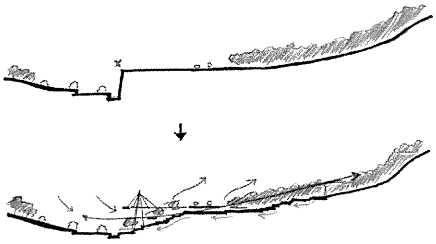
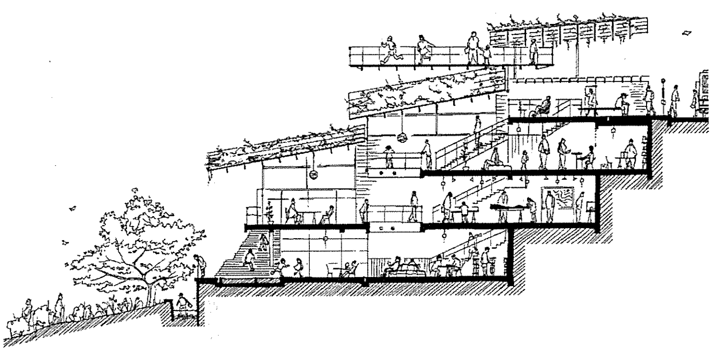


Diagram : 地形の復元

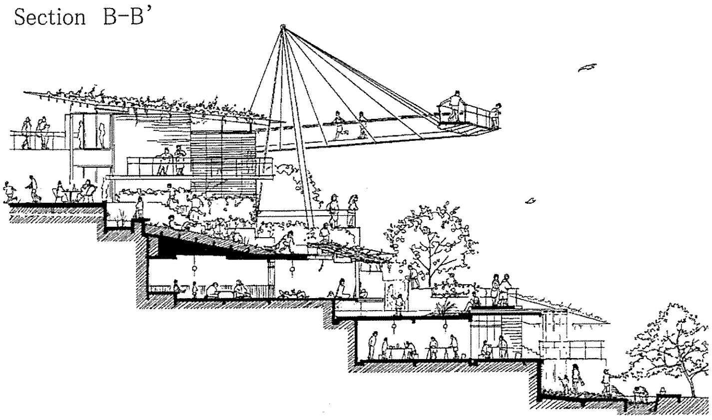


人の手で改変された地形を切り崩し、途切れていた水、風、人の流れを呼び込む。
一方で現状の地形の特異な「高さ」は、空中回廊として残される。

Section A-A'



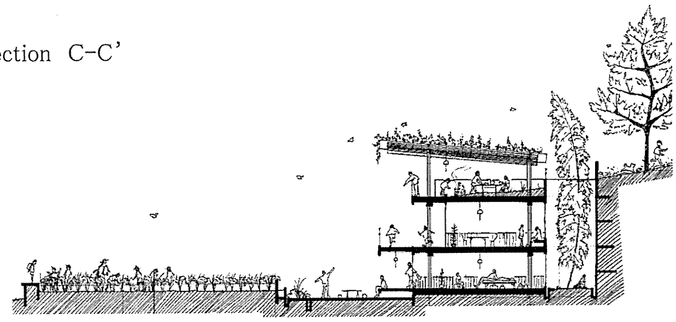
Section B-B'



Program : 子供のための自然学習施設

都会に住む子供たちが訪れ、キャンプや農作業、そして自然のなかでかけまわることを通して、忘れていた感性を取り戻す。同時に、地元の子供や大人、観光客にも開かれ、さまざまな活動が入り混じる。

Section C-C'

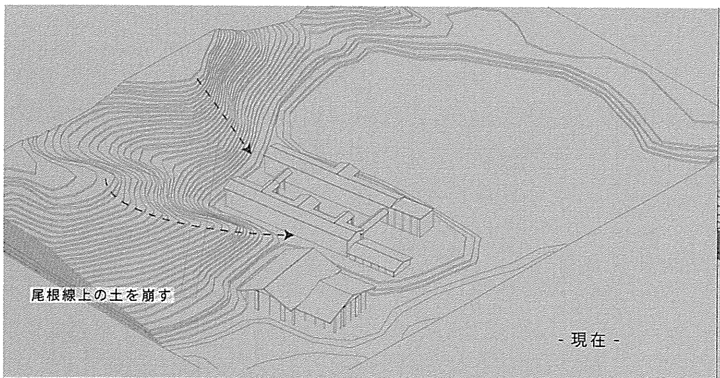


-concept-

山形県東村群山辺町。
2015年までここ山辺町の多くの子供たちが通い、多くの町民に愛されてきた。
廃校となったこの校舎にアグリツーリズム・ワイナリー・宿泊施設の３つの機能を挿入することでこの建築をもう一度咲かせよう。
迫り来る山形の自然災害を受け入れた上での新たな建築のあり方を提案する。
多種多様な植物によって作り出された新たな風景はこれからの建築の姿をあらわしているのではないだろうか。

山辺中学校再計画

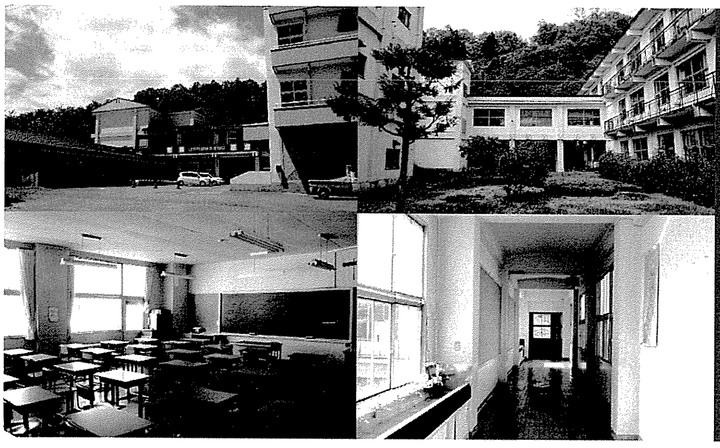
-土と建築の新たな可能性の提案-



-problem-

1. 校舎の一部が崖に隣接し、土砂災害警戒区域に指定されている
2. 築50年の建物であり、耐震未補強であること

→ そこで、校舎の裏山をあらかじめ崩すことで、自然災害を受け入れた上で旧校舎の存続を図る

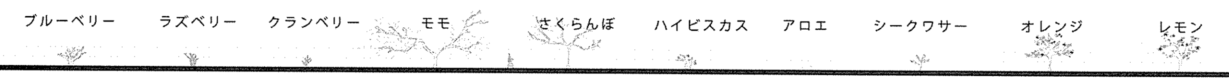


1 果樹園

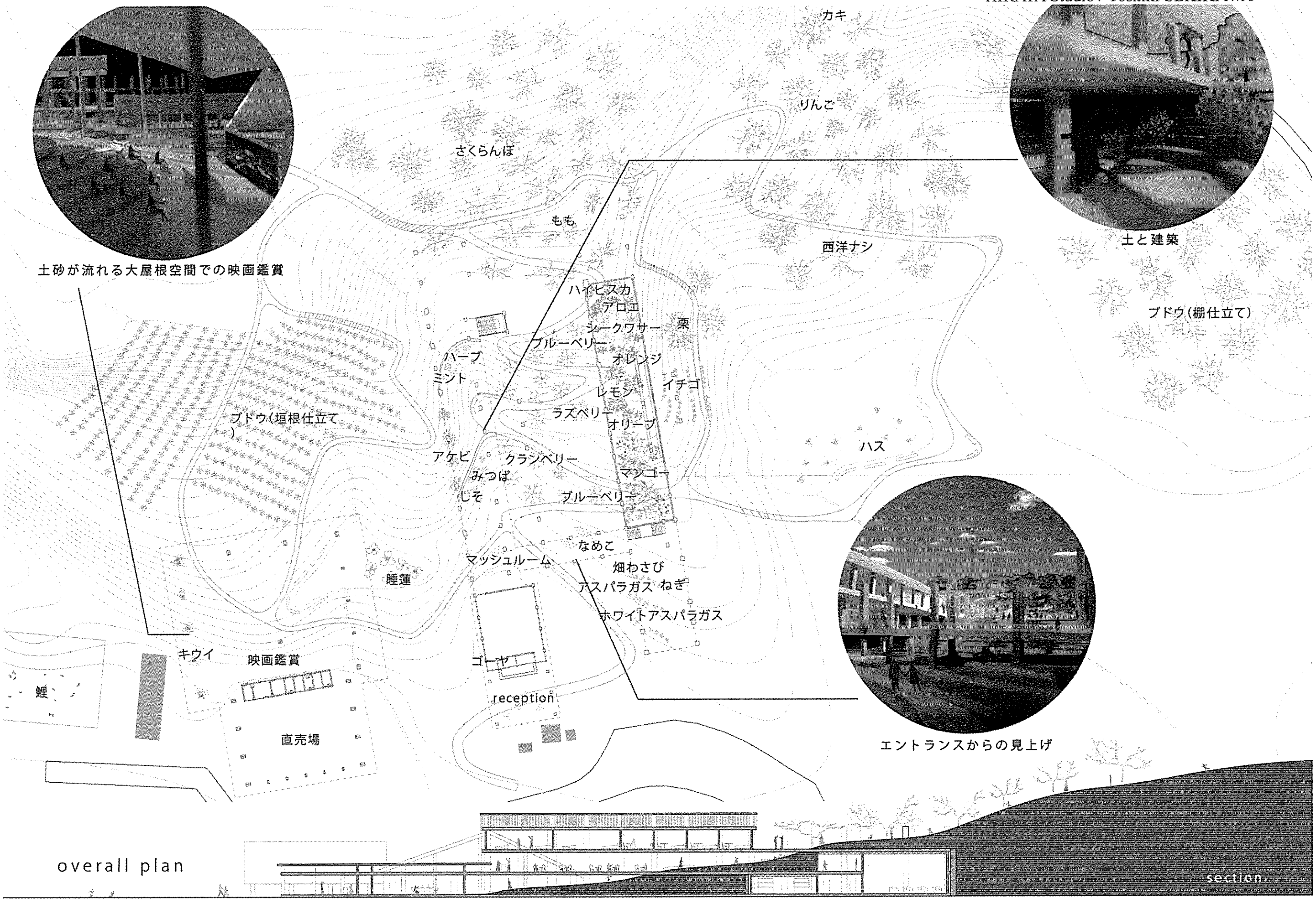
様々なフルーツをもぎ取ったその場で食べることができます

好きな果物をもぎ取る

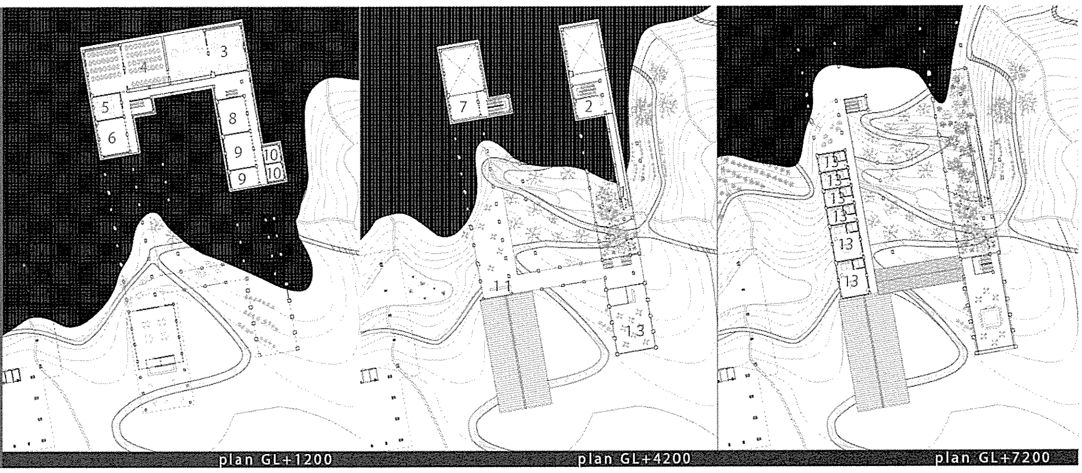
plant elevation



HIRATA Studio / Yoshiki SEKIKAWA

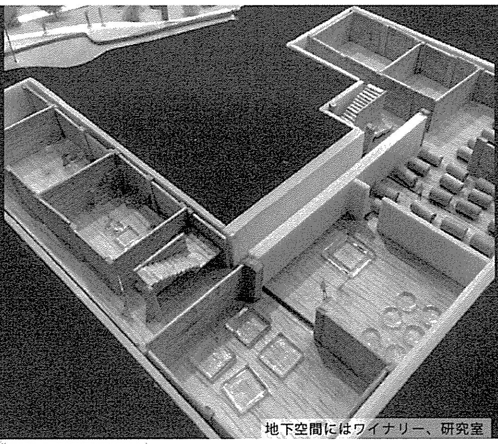


1. エントランス
2. 受付
3. タンク室
4. 醸造室
5. 瓶詰め室
6. 貯蔵室
7. ラベル貼り室
8. 倉庫
9. 研究室
10. w.c.
11. カフェ
12. レストラン
13. バー
14. 宿泊室



2 アグリツーリズム

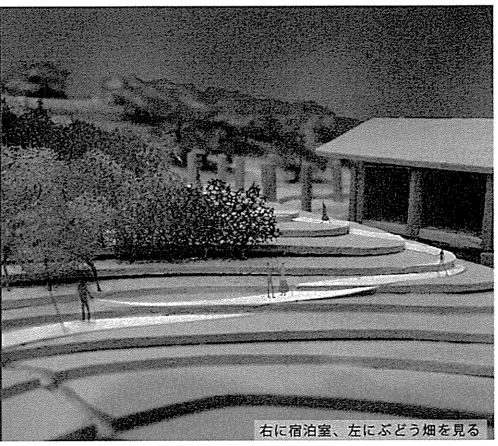
都会からの若者は地元の
人々に教えてもらいながら
農業体験、また農業研究も
可能です



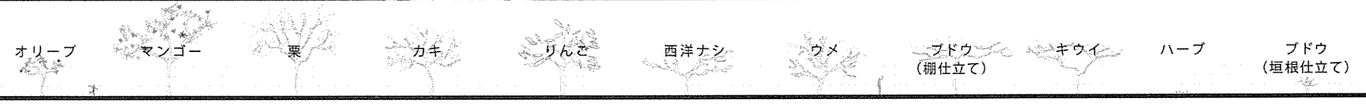
地下空間にはワイナリー、研究室

3 宿泊

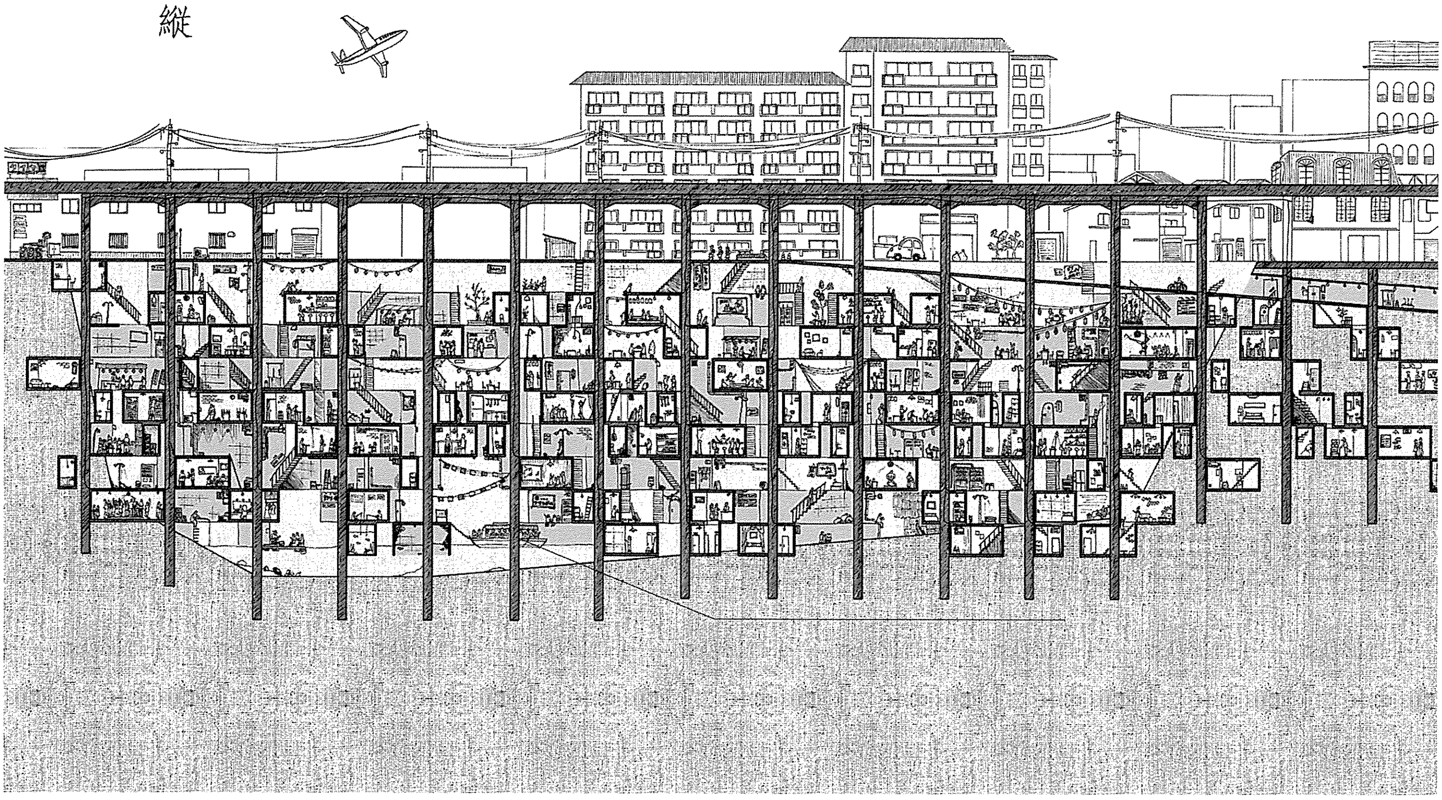
宿泊室もあり、窓からは
ぶどう畑が一望できます



右に宿泊室、左にぶどう畑を見る



石橋~~横~~縦丁 ～高架下再活用の提案～

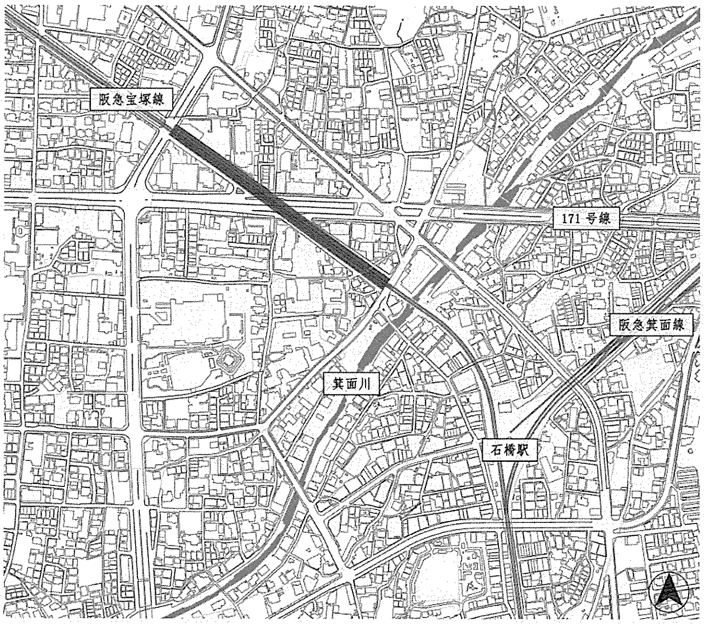


―SITE―

敷地は大阪、阪急石橋駅近くの高架下。
駐車場や店舗としての利用が可能だが、その多くが現在は使われていない。

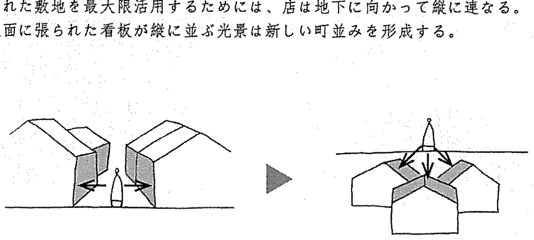
踏切撤去による交通渋滞の緩和や駅付近の再開発を期待され、
各地で次々に行われている高速道路や線路の高架化。
しかし、その敷地の狭さ･日当たりの悪さ･騒音などの問題で、利用されていない空間が多い。

“明るく住みやすいまち”をつくるうえで、不健全なものと見なされ
自由な土地に建設することを禁じられ、まちの隅に追いやられてしまう飲み屋や風俗店は、
そんな高架下に自分たちの新しい居場所を見つけだし、地下深くに世界をひろげていく。



―CONCEPT―

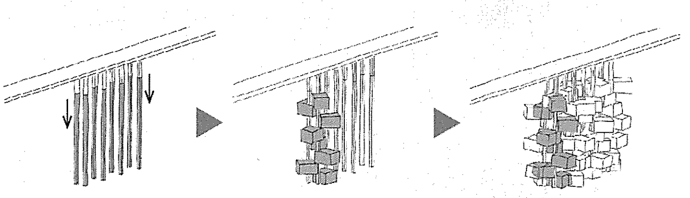
一般的な商店街は、道沿いの面に店の顔を持つ。
そのため、看板や広告は横方向に並ぶ。
しかし高架下という限られた敷地面積の中では、
一般的な商店街のように道の両側に店をかまえることは難しい。
限られた敷地を最大限活用するためには、店は地下に向かって縦に連なる。
屋根面に張られた看板が縦に並ぶ光景は新しい町並みを形成する。



店の顔＝道に面した壁　　店の顔＝屋根面

―DIAGRAM―

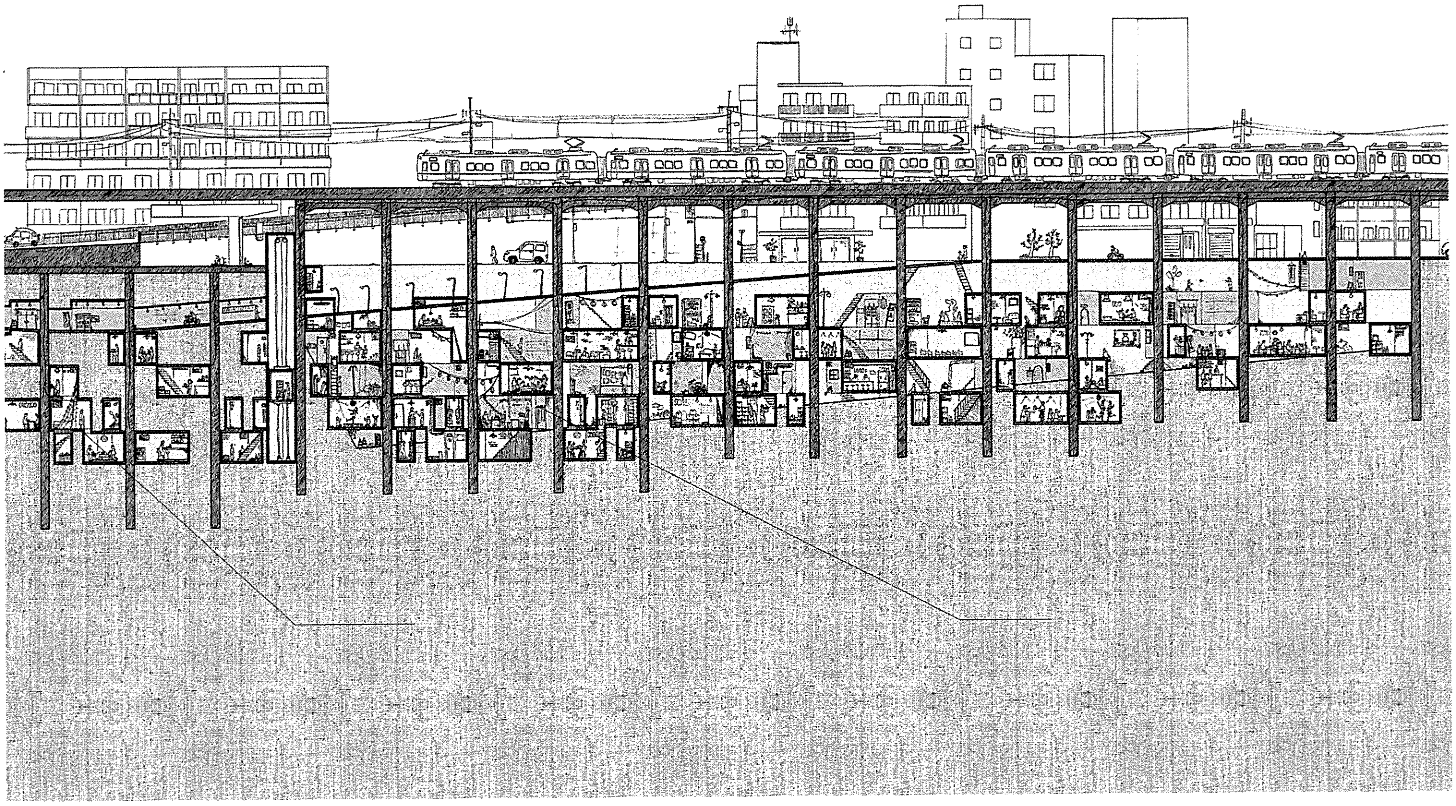
既存の高架柱を地下に向かって延長させる。
その柱にからむBOXはさらに隣合うもの同士がからみあい、
一部は地層部分につながることで、水平方向に固定される。



高架を支える柱を下に延長する。

3/8葉序にならい
柱にBOXをからませる。

BOXのからみついた柱がならび
螺旋状につながる。



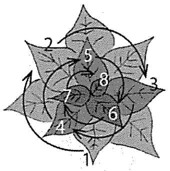
—SYSTEM—

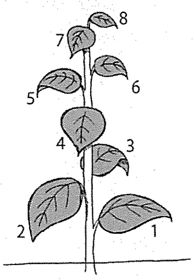
光合成で成長する植物は、より多くの葉が日光にあたるように、
もっとも効率のよい方法で葉をつける。

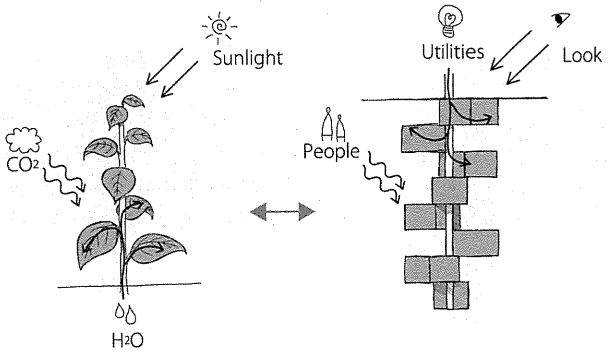
店舗を縦に連ねていく時、ビルのようにただ階を積層させてしまうと、
下のほうの店舗はお客さんの目に触れない。
地下深くに位置する店舗まで光、風、そして視線が抜けるように
葉序と呼ばれる植物の葉の配列に着目する。

葉のつき方は、植物によって様々であるが、
一定の規則性をもって茎に対して配列している種があり、
この配列様式のことを葉序という。

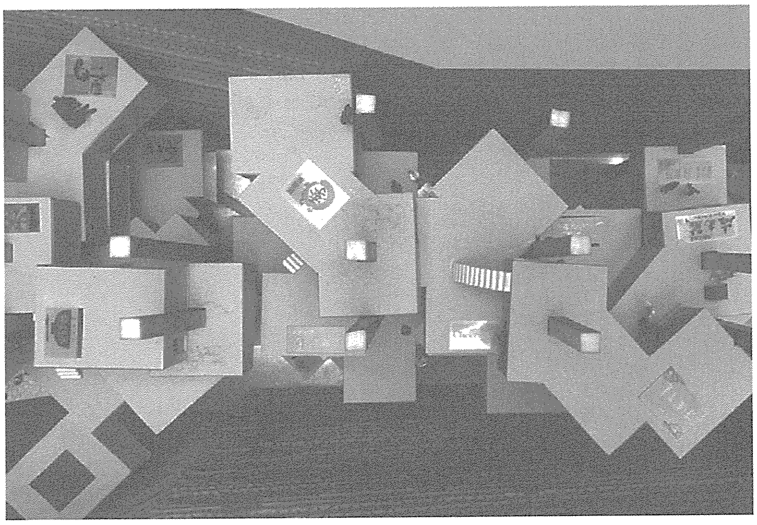
[3/8葉序]
茎を軸にして135°ずつ回転させながら
葉をつけていくと、3周して8枚の葉が
重ならずに日光を受けることができる。

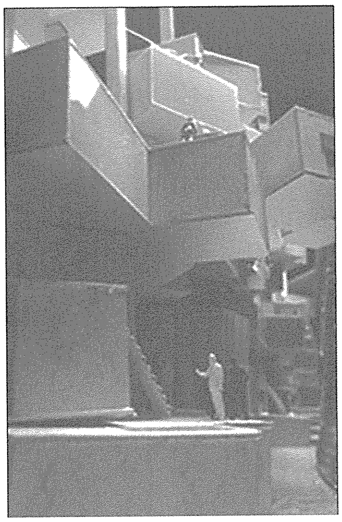


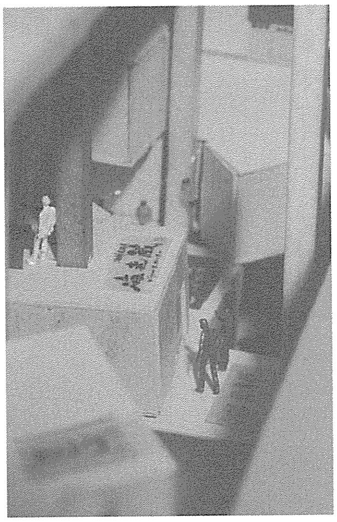




植物が日光·水·二酸化炭素によって光合成をおこない成長するように、
高架の柱を通って各店舗に配給される電気、ガス、水道·地上からの
視線·ここに訪れる人々によって活性化していく。







Gravure

学部４回生の前期では、それぞれの担当教員が独自に設定した設計テーマに応じ、自らの望むスタジオを自由に選択する「スタジオコース」と呼ばれる設計演習課題に取り組む。その中から2016年度の３作品を紹介する。

神吉スタジオ
KANKI studio

角谷 遊野
Yuya KAKUTANI

「場所の力」

これまでにない変化をみせる現代の都市・地域で、どのようなランドスケープが受け継がれ創造され得るだろうか。新しいランドスケープに向かうために、場所に潜む力を読み、その力を顕在化させる建築と都市・地域空間の提案をめざす。各人が選ぶ敷地およびその位置する都市・地域の「場所の力」の読解作業を重視しつつ進める。敷地は、全員参加でそれぞれの現地調査に赴くため、京都から日帰り可能圏内とし、自由に選ぶ。

平田スタジオ
HIRATA studio

関川 圭基
Yoshiki SEKIKAWA

武田 まりの
Marino TAKEDA

「都市を咲かせる」

都市は生きている。数年前まで人気がなかった場所が、突如として咲きほこる。かつては人であふれていた場所が、萎んでしまうこともある。ちょっとしたきっかけで、つぼみが花咲くかどうかが、変わることもある。その場所の潜在的な力、あるいは人々がその場所に抱いている潜在的な思いを、建築によって顕在化できないだろうか。コマーシャリズムでもなく、ポリティカルコレクトネスでもない、ただ、群れとしての人々の思いを咲かせるような建築を構想すること。